前半26分、先制点を決めた田中を祝福する駒大イレブン(岩田陽一撮影)

JR東日本カップ　2002　第76回関東大学サッカーリーグ戦(後期)　1部リーグ　最終節

KOMAZAWA-TSUKUBA

駒澤大学2−0筑波大学

吹き荒れた赤い歓喜 直接対決制し逆転優勝

みんなで勝ちとった歴史的な勝利！

ついにこの瞬間が訪れた。主審のタイムアップを告げるホイッスルが西が丘に響き渡った瞬間、赤い歓喜が76度目のリーグ戦最終節で初めて爆発した。選手、監督、コーチ、スタッフ、関係者、そしてこの日、西が丘に駒大を応援するために集まってくれた人たちが一体となって勝ちとった歴史的な勝利だった。

この試合は『勝てば優勝』、それが駒大にとってすべてであった。「試合内容とかそういうのじゃなくてとにかく勝つ！絶対に負けない！ってみんなで盛り上がって臨めた」(**角屋**)というように試合直前の選手たちの表情はどこかフッきれていた。

試合は序盤から優勝決定戦の名にふさわしく激しいプレスの掛け合いとなった。駒大はその中でも今までチームを引っ張ってきた**深井**、**巻**を中心に積極的にシュートを放つ。試合が動いたのは26分。筑波大・**小林**のミスパスを**巻**が拾い、前線にいた**田中**へ。これを受けた**田中**はディフェンダーをかわし左隅へシュート。「魂で蹴り込んだ」という一発は貴重な先制点となった。

しかし、筑波大も優勝にかける気持ちは同じ。38分、ゴール前で**新沼**と筑波大の**兵働**が交錯し、**新沼**がこぼしたボールをいち早く反応した**兵働**ががら空きのゴールマウスへシュート。しかし、カバーに入っていた**河合**がゴールラインぎりぎりで体を張ったクリア。「あのクリアが一番大きかった」(**中後**)と試合後、中後が話したように、ここで失点していればこの試合はどう転んでもおかしくなかった。

その直後、「最後だから中途半端なプレーはしたくなかったんでシュートまでもっていこうとおもって」(**橋本**)と語ったドリブルからのシュートは筑波大、**阿部**の手をすり抜けてゴールへ。**橋本**のドリブルシュートに赤い歓喜が吹き荒れた。

後半は追いかける筑波大が様々な手を使い、反撃を仕掛けてきた。しかし、「相手が攻撃を仕掛けてく